

『 互いの同じ信仰によって 』

ローマ人への手紙 1章 8～15節

青木 信太郎 牧師

◆ 神への感謝の理由

パウロはこの手紙の導入で先ず感謝を表しています。【8節】“まず第一に”と訳されている言葉は新共同訳聖書では“まず初めに”と訳されています。「先ず初めに、先ず最初に」パウロは感謝を述べるのです。何を感謝しているのでしょうか？【それは、あなたがたの信仰が全世界に言い伝えられているから】です。「あなたがたの信仰」とは言うまでもなく、ローマ諸教会に属するキリスト者たちのイエス様を救い主と信じる信仰のことです。ではパウロが感謝を表している相手、対象は誰でしょうか？それは【私の神に感謝します】とあるように父なる神様に感謝を表しているわけです。神の福音を宣べ伝え、多くの者が信仰を持つことが出来るようにと宣教の歩みを続けていたパウロですから、その喜びと感謝は当然でしょう。自らが種を蒔いてそして成長のためにそこに滞在したわけではありません。しかし自らが直接関わっていようがまいが、そこにイエス・キリストを信じる信仰者の群れが存在していることをパウロは感謝しました。【イエス・キリストによって】と訳されているところは【イエス・キリストを通して】という意味です。パウロは確かに理解していました。人がイエス様を救い主と信じて罪を悔い改め、父なる神様に立ち返ることが出来るのは自らの功績ではないことを。主なる神様がその人を捉えて下さり、信仰を与えてくださることをパウロは確信して伝道していたのです。使徒の働きでは聖霊なる神様が常にそこに働いておられることを私たちも確認して参りました。パウロはローマのキリスト者に感謝を表すというよりも、ローマの人々を捉えて下さり、イエス様を救い主として信じる信仰を与えてくださった主なる神様に感謝を表明しているのです。信仰は父なる神様が与えてくださり、導いて守ってくださることを確信しているからこそ、パウロは先ず初めに神様に感謝を捧げているのです。

◆ 切実な願い

次にパウロは自らの切実な願いとその理由を述べています。【9-12節】ローマのキリスト者たちは未だパウロのことを詳しくは知らなかったでしょう。パウロもまた、まだ足を踏み入れたことのないローマの教会の人々とは面識がありません。お互いの詳細な素性と現状が分からない中で、パウロの内側に抱く熱い想いを担保する人はおりません。ですからパウロは【私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊を持って仕えている神があかししてくださる】と前置きしています。「父なる神様が、私の内なる想いをご存知である証人です。その神様の御前にあって嘘偽りのない私の切実な願いをあなたがたに伝えます」ということになりましょう。そしてパウロの切実な願いとは、「私はあなたがたのことを思わない時はない。いつも祈り願っていることは、神様の御心に叶って道が開かれて、あなた方ローマ諸教会の皆さんのところへ行きたい」という思いでありました。そもそもパウロがローマに行く計画は神様の導きによって与えられました。しかしその時がいつであるのか主は明確にされておられませんでした。小アジアそしてマケドニヤへ渡りヨーロッパに足を踏み入れていたパウロは主が与えられたご計画であるローマへの道を自らも強く願っていたことでしょう。【今度はついに道が開かれて】と記されているように、今この手紙を記しているパウロは直ぐにはローマに向かうことが許されておりません。伝道旅行で廻ったギリシャを始め各地方の諸教会から貧困のユダヤ地方諸教会に対する献金を携えてエルサレムに戻らねばなりません。そのような現状にあって、しかし【いつも祈りのたびごとに】ローマへの道が開かれるようにと切実な願いを込めて祈っていたのです。その理由

は【御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて、あなたがたを強くしたいからです】というものです。御霊の賜物についてパウロは別の箇所でも幾つか語っています。「預言者、教師、奇蹟、癒し、助ける賜物、治める賜物、異言など」まだその知識に達していないであろうローマのキリスト者たちにこれらの賜物を主に求めることを教えたいと考えていたことでしょう。そしてローマの諸教会が堅く立って強められることを願っていたことでしょう。しかしパウロはまるでこの理由を打ち消すかのように、最たる理由はこれであると言わんばかりに12節で「というよりも」と訳される前置詞を用いて語っています。パウロがローマに行きたいと切実に願う最たる理由は【あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです】ということでありました。新共同訳聖書は「あなたがたと私が互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです」と訳します。パウロは何よりもお互いに励まし合えることを切実に願っていたのです。パウロもまたローマの信徒と会って主にある交わりを通して励ましを受けたいと願っていたのです。あのナザレのイエスの十字架と復活によって罪赦され救いに導かれているとの福音を信じる同じ信仰をお互いに持っていることをパウロは確信していました。その事ゆえに与えられる励ましをパウロは願っていたわけです。人は皆違う性格を持ち、バックボーンも違います。しかし御子イエス・キリストの福音を信じる信仰は同じであり、そのことゆえに励ましも慰めも成長も与えられることをパウロは確信していたのです。

◆ 新たな信仰者を求めて

13節でもう一つの大きな使命をパウロは明らかにしています。【13節】「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい」は原文では「兄弟たち。知らずににいて欲しくない」と直訳できます。パウロが注目して欲しい事柄を語るときに好んで用いた強調法です。【私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って】いると語っています。すなわちパウロがこれまで各地方で福音を宣教し、そこで幾人もの信仰者が与えられたように、ローマでも宣教のわざに励みたいと願っていることが分かります。しかし【今なお妨げられている】とは主なる神様が今は未だその道を開いておられないと言う意味です。14節では自らの宣教の使命について独特な表現でパウロが強い意思を表しています。当時のローマ帝国を中心にギリシヤ文化圏の中に生きる人々にも、未開人とはその他地方の諸文化に生きる人々にも、そして現代のように知識教養が広がりにくい環境下において、民族、文化、教養、立場を超えて【返さなければならない負債を負っている】すなわちイエス・キリストの福音を宣教しなければならないと自らの使命を明らかにしているのです。パウロが表現する“返すべき負債”とは、かつて自らが誰であろうとキリスト者を弾圧、迫害して死に迫りやる者であったにも関わらず、主が私に信仰を与えてくださり、すべての人に福音を語るように選んで召してくださり、キリストに従順に仕える者へと変えてくださったという1節の自己紹介が思い起こされるのです。【15節】これはローマの教会のキリスト者に対してではなく、ローマ諸教会の向こう側にいるすべての人々に福音を宣べ伝えたいと言うパウロの強い希望であります。

パウロはこれまで同様、ローマでもイエス・キリストの福音を大胆に宣教することを自らの使命と考えていました。信仰者という実りがローマ帝国でも与えられることを切に願っていました。その願いをローマ教会のキリスト者たちにも同労者として共有していただきたいと言う願いがあったことでしょう。別の箇所(15:23～)に寄ればパウロはローマ教会の協力を経てイスパニヤ(スペイン)への宣教をも夢見ていました。ローマでもスペインでも、私たちと同じ主イエス・キリストを信じる信仰者が更に与えられることを同労者として共に求めて行きたいと願っていたのではないのでしょうか。

◆ まとめ・お勧め

今朝のテキスト、パウロによるローマ人への手紙の導入から強調されている事柄は“信

仰”であります。最後に短く三つのことをお勧めさせていただきたいと思います。

①私たちの教会は、お互いを喜び主に感謝する教会でありたいと思います。お互いを喜び主に感謝するとは、主イエス・キリストにある同じ信仰が与えられた集まりであることを神様に感謝するという事です。お互いの性格や人柄、長所短所ではありません。今ここに集う私たちは同じ信仰、主イエス・キリストによる救いを信じる信仰によって一つに集められているのであり、同じ信仰に生きる存在としてお互いを喜び主に感謝するのです。

②私たちの教会は、同じ信仰によって励まし合うことのできる教会となりたいのです。礼拝において心と声を合わせ主を賛美し、心と声を合わせ主の祈りを祈り、信仰告白を行い、同じ主の御言葉によって毎週を歩むことが出来るのです。同じ信仰を共に確認する礼拝こそが私たちの励ましの源泉です。そして教会の交わりにおいて私たちがお互いに紡ぎだす励ましと慰めの言葉は同じ主イエス・キリストへの信仰から生まれなければなりません。毎週の礼拝と交わりによって確認される信仰がお互いの励ましであることを胸に刻みたいのです。

③私たちは同じ信仰に生きる新たな魂が獲得されるための同労者です。私たちと同じ信仰に生き、同じ恵みと平安が新たな魂にもたらされることを求めたいのです。求霊のために、宣教のために心一つに毎朝祈ることが出来ることは何と幸いでしょうか。主は必ず実りをごさしてくださることを信じて、祈りつつ宣教してまいりましょう。

お互いの同じ信仰を主に感謝し、お互いの同じ信仰によって励まし合い、同じ信仰に生きる魂を得るために宣教する教会でありたいと願って止みません。